

## 「気づこう」のちの尊厳」とは

佐野之人（山口大学）

### はじめに

おはようございます。只今ご紹介に与りましたとおり、私は佐野之人と申します。演題は『「気づこう」いのちの尊厳』とは「です。ここでは皆さんとともに「気づこう」いのちの尊厳」について哲学したいと思えます。哲学とは何か。これは哲学する者にとって最も難しい、最後の問いになります。ここではとりあえず根本的に考える、という意味で用いたいと思えます。

第一にこれは「誰に」向かって「気づこう」と言っているのでしょうか。もちろん「いのちの尊厳について気づいていない者」、「いのちの尊厳に気づこうとしていない者」（その中には「いのちの尊厳について分かったつもりになって気づこうとしない者」も含まれるでしょう）、そうした人たちに向かって言っていることになります。これは他人事でしょうか。これは私を含め、私たちすべての人間のことではないでしょうか。私たちは「いのちの尊厳」に本当に気づいている、と言えるでしょうか。とてもそうは思えないと思えます。そうだとすると、「気づこう」は私たち一人ひとりに向けて呼びかけられた言葉だということになります。

それでは「誰が」呼びかけているのでしょうか。さしあたり私たち自身が、「いのちの尊厳」を見失いがちな自分自身に対して呼びかけているように思われます。しかしさしあたり大抵はいのちの尊厳に気づいていないのが私たちです。だとすると「気づこう」と呼びかける者は、「さしあたり大抵の私」とは違ったレベルの「私」でなければなりません。「気づこう」が単なる掛け声でなく、心の底からの呼びかけであるならばそうならざるをえません。私はそれが「いのち」ではないかと考えています。つまり「いのち」が私たちに向かって「気づこう」いのちの尊厳」と呼びかけているのです。それは私たちがさしあたり大抵は「いのちの尊厳」に気づいていない、気づこうともしないからです。そこで私たちがどのような仕方、いのちの呼びかけに気づかず、また気づこうとせず日常生活を送っているか、それにもかかわらず「いのち」はどのような呼びかけをしているのかを次に考えてみたいと思えます。

### 1. 「おはよう」から「私」

私は最初に「おはようございます」と申し上げました。皆さんも挨拶を返してください。しかし「おはようございます」とは何でしょう。ここで何が起きているのでしょうか。

通常こんなことに誰も気を留めたりはしません。しかしこういうアタリマエのところ、とりわけ足下の出来事を素通りするところに哲学はありません。ここには「いのち」の呼

びかけはなかったでしょうか。私たちはその呼びかけに気づかなかった、気づこうとしなかったのではないのでしょうか。

私が「おはようございます」と言い、皆さんが「おはようございます」と返す。この何の変哲もない日常の挨拶が、決してただ事でないことは、挨拶が返ってこなかった時のことを考えればわかります。はじめは、相手が気が付かなかったのかも、と思います。しかし明らかに気づいていると確信した時はどうでしょう。「私はあの人に何か悪いことしたかな」と自らを省みることでしよう。しかしいくら考えても思いつかない。どうでしょう。どんな気持ちになるでしょうか。それが自分にとって大切な人だったらどうでしょう。しかもそれが毎回だったら。あるいは誰からも挨拶が返ってこない人生、そんな人生には誰も耐えられません。挨拶は人間の生き死にに関わる重大事なのです。

何故でしょうか。挨拶の中で何が起きているか考えてみましょう。お互いを仲間と認め合う、存在をお互いに認め合うこと、それが挨拶の中で起こっていることだと考えられます。それによって自分の存在を確認することができます。「いていいんだ」、と。その存在とは他ならぬこの私、他と替えることのできないユニークな存在としての私です。他の誰でもいいというのではありません。こうした存在のあり方が「尊厳」です。尊厳とは最高の価値を持つが故に他の何者とも交換ができない、という意味です。

私たちの「いのち」は自分を他に替えることのできないユニークな存在として、つまり尊厳あるものとして他に気づいてほしいという切なる願いを持っています。何気ない「おはよう」という言葉の中に「気づいてほしい」という「いのち」の願いは間違はなく籠められています。気づいてもらえなければ人は悪いことをしてまでもこのニーズを満たそうとします。人間は「おまえなんかいてもいなくても同じだ」、という扱いに決して耐えることはできません。

また私たちの「いのち」は自分を他に替えることのできない大切な存在として、自分自身に気づいてほしいという切なる願いをも持っています。「自分はいなくてもいい存在だ」と思うことにも人間は耐えることはできません。生きる意味を本当に失うと人間は生きてはいけません。本当に死んでしまいます。だから人間は生きる意味を失いそうになると必死になって何かで生きる意味を満たそうとします。たとえそれがどんなに悪いことでも生きる意味を失うよりはましだからです。

挨拶の中には生死にかかわる切実な「いのち」の願いが籠められています。挨拶が返って来ない時のダメージは測り知れません。この点で挨拶をする方に大きなリスクが生じることになります。返ってこない可能性があるからです。慣習上、目下の者が先に挨拶するのもそのためであると考えられます。しかしこうした命のやり取りのような殺伐とした挨拶の仕方が最もよい挨拶とは言えない、ということも私たちはよく知っています。最もよい挨拶とは、会ったとたん、会えて嬉しいという気持ちのままにする挨拶です。これは犬がしていることかもしれません。朝起きると犬が尻尾を振って喜んで舐めに来る。これは犬挨拶とは呼べないかもしれませんが。ただ嬉しいからする。しかしこれが挨拶の原型かもしれないのです。

他者にも自分にもユニークな存在として認められたい、という「いのち」のニーズは、自分より大きい何かと連帯したいというニーズ、さらにはそうした自分より大きい何かの中で役に立ちたいというニーズと深く関わっています。自分より大きい何か、これは愛するものとの人間関係や家族といった小さいものから、人類、自然、神といった大きなものまで含まれます。「いのち」は自分がこうした自分より大きい何かと繋がっているという感覚を必要とします。一体感、あるいは帰属意識、帰依の感情という形をとることもあると思います。全く誰とも何とも繋がることのない完全な孤独を人間は非常に恐れます。繋がりが得られなければ人間はどんな悪い集団の仲間入りもします。

また「いのち」は自分が役に立っているという感覚を必要とします。あるいは自分を必要としている人がいる、という感覚の場合もあると思います。人間はどれほど苦しくてもその苦しみに意味を見いだせるならば、耐えられます。自分のやっていることが何かの役に立っている、その仕事を誰かが待っている、自分を待っている人がいる、といった感覚は仕事をする上、生きていく上での強いモチベーションとなります。逆に人間は無意味には耐えられません。ドストエフスキーも「一人の人間を完全に打ちのめし、崩壊させる方法、どんなに残酷な殺人者でも犯罪を未然に思いとどまるような恐怖を与える最も恐ろしい刑罰とは、絶対かつ完璧に無意味であり、不合理な性格を持つ仕事をやらせることである」と言っています。しかし役に立っていても、人間は機械の部品のような扱いにはやはり耐えられません。仕事に自分から打ち込んでいき、自分ならではの仕事のやり方で、他人にまねのできない仕事をする。そういう独自の仕方で役に立っている。そのような感覚を人間は絶対必要としているのです。

以上の3つの「いのち」の願いはアメリカの経営哲学者、トム・モリスの「魂の4つのニーズ」に拠っています(トム・モリス『アリストテレスがGMを経営したら』ダイヤモンド社。1998年)。彼はアメリカ人らしくそれを「4つのU」として覚えやすくまとめています。「4(U)D」は「Uniqueness (独自性)」「Union (連帯)」「Usefulness (有用性)」「Understanding (理解)」です。それでは魂の4番目のニーズである「理解」とは何でしょうか。トム・モリスによれば、それは自分が何者で、どこにいるかについての理解です。真理の知と言ってもよい。彼は人間の魂はそうした真理の知へのニーズ(本当のことが知りたい)を持っていると言うのです。それがどういうことを意味するのか、少しトム・モリスを離れて自由に哲学してみたいと思います。

「いのち(魂)」の3つのニーズとは、自分がユニークな存在であること、自分より大きな何かと連帯すること、自分が独自の仕方で役立っていること、そのことを感じたいという願いでした。ですがよく考えてみると、こうしたあり方は自然のすべての存在(万有)がすでに示していることです。

第一に万有のどのひとつをとっても同じものではありません。それはどれもただ一度という仕方で生まれ、そうして消えていきます。万有の一つひとつはまぎれもなく掛け替えのないユニークな存在です。第二に万有のいずれも宇宙という全体と連帯し、全体の働きを受けてはじめて存在します。全体の中のどの働き(条件)が欠けても存在することができ

ません。その意味では万有のたった一つを存在させるために全宇宙が働いていると言えます。その一つの存在が消える場合も同じことが言えます。第三に万有のどの一つをとつてもそれぞれの場合と瞬間において独自の働きをしています。微細に見るならばどの一つをとつても同じ働きをしています。その働きは他の存在の働きと相俟って全存在たる宇宙へと及んでいきます。その意味ではその一つの働きは宇宙のすべての存在のために働いていると言えます。こうしたあり方ゆえに宇宙万有は調和することができます。その構造を西洋古典である古代ギリシャでは「ヘンカイパーン（一にして全）」、東洋の仏教では「一即一切、一切即一」と呼び、最近では「One for all, all for one（一人はすべてのために、すべては一人のために）」として人口に膾炙しています。こうした構造は生き物の有機的な構造においてもつとはつきりと目に見えるような形で表れてきます。体のどのよう小さい部分も全体を反映し、その部分の働きが全体の命を支えています。

驚くべきことはこうした言葉が人間のチームワークの理想を表す言葉として用いられ、人間がそのことを直感的に知っているということです。企業においてもそれは言えるでしょうし、スポーツや合奏・合唱などの芸術でもつと純粋な形で現れて来るでしょう。あらゆる人間関係において人間はこうした自然のあり方を理想として、これを求めていると言えるでしょう。

先程挨拶の原型は、挨拶と言えるかどうか分からない、ただ嬉しい、という気持ちのままに行動する犬のあり方にある、と申しました。挨拶ばかりではありません。生き物の生き方死に方そのものが人間のあり方の理想とされます。芭蕉に「やがて死ぬ けしきは見えず 蟬の声」という句があります。「やがて」とは現代語の「やがて」とは異なり、「すぐ」という意味です。その声には生きるといふことの儚さと、その儚い生涯の今といふこの一瞬をひたすら、ただ生きる、生死に徹するといった澄んだ声とが聞こえてきます。人間が到底達しうる境地とは思えません。

しかし人間も自然万有の存在の一つです。人間がどれほど迷い、苦しみ、愚かな行為を重ねようと、自然万有の存在というあり方から出ることはありません。原理的にできないのです。ですから人間はその自覚のあるなしにかかわらず、事実としてすでに自然と同じあり方をしているのです。一人ひとりがすでにユニークな存在として、宇宙全体に繋がり、全体の働きを受けて、ただ一度という仕方生まれ、生き、そうして死んでいきます。その人間の働きはどれほど目立たないものであっても必ず他に影響を及ぼし、それらが相まって宇宙的全体を成しています。また人間も苦しみ、悩みながら、実は蟬と同じようにひたすら生き、そうして死んでいきます。何ら変わりはありません。問題は人間がそのことに「気づかない」というただその一点にあるようです。

どうして人間はそのことに「気づかない」のでしょうか。それは人間がそのことに「気づく」ためではないかと私は考えています。ここにトム・モリスのいう「Understanding（理解）」ということが関わってきます。生き物はひたすら生き、ひたすら死んでいきます。物もただ生じ、ただ消えていきます。そこに迷いというものはない。その代わり気づきというものもない。「気づく」ということが成り立つためには、一旦その外に出て、「気づかな

く」なる必要があります。気づきつばなしでは気づくということがそもそも成り立たない、と言ってもよいかと思います。外に出て、迷い、悩み、苦しむという人間のあり方がそこに現われて来ます。

生き物も自分がユニークな存在であることを他から認められたい、自分でもそのことを確信したい、などというニーズは感じないでしょう。そんな迷いは微塵もありません。しかしその代わり、自分がそうした存在であることに「気づく」こともないでしょう。それに「気づく」には、自分が「いてもいなくても同じような存在だ」という不安に投げ出される必要があります。そうした不安を根源的に抱えているからこそ、取り替えの効かない自らの存在の文字通りの「ありがたさ」に「気づく」ことができるのだと思います。

また全ての存在はただ一度という仕方で生じ、そうして消えていきます。そうした儂さのうちにその物の掛け替えのなさ、大切さがあります。桜は散るからこそ美しいのであり、私たちは、それが散るということを先取りして美しさを感じ取っているのだと思います。命あるものごととおしいのは、それがやがて死ぬからです。しかし桜も生き物もそのことにおそらく気づいてはいません。それに気づくためにはやはり一旦その外に出る必要があります。そうして形あるもの、生あるもの、人間の、そうして自らの命の儂さを身にしみて知る必要があります。それを通してのみ人間は、存在の掛け替えのなさ、大切さ、尊さ、美しさに「気づく」ことができるのだと思います。

さらに生き物を含めた万有は、自分より大きな何かと、究極的には宇宙と繋がりたいなぞという願いはもたないでしょう。すでに One for all, all for one という最善の仕方まで繋がっており、そこをひたすら生き、ひたすら死んでいく、あるいはただ生じ、ただ消えていくだけです。しかしそれだから、それらはそうした自らのあり方に「気づく」ことができない。そのことに「気づく」ことができるのは、そうした連関から切り離され、自分という枠の中に閉じ込められ、徹底した孤独を味わうことのできる者、つまり人間だけです。人間はその非常に強い自意識のために全てを自分の理解や価値観の中に閉じ込め、常に自己中心的に考え、判断し、評価し、行動します。人間同士の間にはコミュニケーションすら成り立ちえないように思われます。こうして人間は一人で生まれ、一人で生き、一人で死んでいくという徹底した孤独の中に投げ出されることとなります。しかしこのように自らを閉ざすから、開かれるということが意味を持ちえます。開かれつばなしでは開かれるということもありえないでしょう。こうした根源的な孤独に悩み苦しみつづ、人間は自分より大きい何かとの繋がりを求めます。しかし本当に繋がるようとするならば、手っ取り早い何かで繋がるようとするのではなく、深みにおいて繋がる必要があります。その深みとはどんな些細なことのうちにでもある深みです。相手との会話でも、目の前の仕事でもいい。自分を無にしてそのことに徹することです。そこに自分と相手との、自分と仕事とのコミュニケーションが成り立ってきます。あらゆるものがこうした深みで繋がっていることに「気づく」、こうした可能性が人間にはあるのだと思います。

宇宙における万有は、みな何故なく存在しています。一定の何かのために存在しているということがありません。これに対し人間の作ったもの、例えば道具などは全て一定の目

的、何のために、があります。ペンは書くために存在しています。しかし人間の作ったものは結局のところ人間のために存在していると言えます。自然のものにはその「何故」がない。その意味では無意味です。しかしそれだからこそ一定の意味には還元されない無限の意味を持つ、と言えます。薔薇は人間に喜ばれようなどとは思わず、何故なく咲くからこそ美しいと言えます。

人間はあらゆるものを自己の価値基準に基づいて意味づけます。そうした価値体系の頂点に位置するのが最高の意味と価値を持った「自分」です。人間はそうした視点からあらゆるものを意味づけているのです。無意味、というのもそうした視点からの一つの意味づけに他なりません。人間は、「自分」がそうした一切の意味づけを失った無意味にさらされることに極めて強い不安を覚えます。こうして人間は自分を「何か」で支えようとしています。自分にはこれがあるから、生きる意味があるのだ、という仕方で自分自身を説得させます。これはその背後に根本的な無意味を抱えているからです。才能にせよ、財産、地位、名誉、権力にせよ、そうしたものは早晚、最後のところで自分を支えるものにはなりえないということが明らかにあります。こうして人間は根本的な無意味に突き返され、それと向き合わざるを得なくなります。しかしこのような、自分が無意味であるという根源的な不安があるからこそ、一定の意味に還元されない無限の意味に「気づく」ことができるのだと思います。それは目の前のことを、これが何かのためになるとか、何の意味を持つかということを考えずに、それ自身を目的にして、一所懸命に行うことの中に気づかれてくるものだと思います。それ自身を目的にするということは、ひたすらということであり、生き物などの自然の事物のあり方に通じます。それと同時にそれ自身を目的にするという構造は「遊び」の構造でもあります。遊びは何かのためにするのではなく、遊ぶために遊ぶ、楽しむために楽しむ、ということです。目の前のことを楽しんで集中している、その姿は何故なく咲く薔薇の美しさに通じるものがあると思います。

人間が自然のあり方を失ったのは、そうした自然のあり方に自覚的に返り、こうしたあり方に「気づく」ためなのかもしれません。少なくとも「気づく」ためには一度見失う必要があります。しかし人間がどれほど見失い、迷い、悩み、苦しもうと、「いのち」はつねに私たちに「気づこう」と呼びかけ続けていると考えられます。それが魂の第4のニーズである「Understanding(理解)」だと思えます。それはすでに第1の「Uniqueness(独自性)」、第2の「Union(連帯)」、第3の「Usefulness(有用性)」のニーズに含まれていたものと同別のものではありません。人間ののっぴきならない切実な願いにはすべてこうした「いのち」からの呼びかけがあると考えられます。そうしてそれは「おはようございます」といった何の変哲もない日常の中でも、私たちはそれを大抵は聞き逃してしまっていますが、呼びかけているのだと思います。

## 二・「私は佐野之人です」

それにしても「いのち」が私たちにつねに「気づこう」と呼びかけている、などと言う

と「いのち」なるものがどこかにいるような感じがして、何やら異常な経験であるような印象を免れないでしょう。「いのち」とは何でしょうか。そのありかはどこにあるのでしょうか。これについて考えないことには「気づこう いのちの尊厳」について哲学したことにはならないでしょう。

私は最初に「おはようございます。私は佐野之人です」と申し上げました。「おはようございます」について哲学したところ、そこには「いのち」の呼びかけがあるように思われました。しかしその「いのち」の何であるか、ということ、その所在が今問題になっているのです。それを今度は「私は佐野之人です」を手掛かりに哲学してみましよう。

「私は佐野之人です」。普通こんなことを問題にするなどは夢にも思わないでしょう。問題にしていたら日常生活が成り立たなくなってしまうことでしょう。しかし今はそれを哲学しなければなりません。これは足下中の足下の問いであると言えるでしょう。

さて「私は佐野之人です」とは何でしょう。ここで何が起っているのでしょうか。そもそも私は「佐野之人」でしょうか。私は「佐野之人」ではありません。「佐野之人」は名前にすぎませんから。私は名前ではありません。ここで訊いているのは「私は佐野之人です」と言っているその「私」が何者か、ということと、「私はこの身体だ」とお考えになる人もいらつしやるかと思えます。しかしそのようにおっしゃる「私」が何者か、それをお尋ねしたいのです。「私は私だ」。なるほど。しかし「私」というのも名詞であり、名前にすぎない。そのように自分を「私」と名付けるのは何者か、それをお伺いしたいのです。

ここで私たちは実に困ったことになってしまいました。たしかに私を私と名付けている私がいる。しかしそれをどのように名付けても、そのように名付けている者が誰かと問われることになってしまふからです。つまり「私は佐野之人です」ということの根本には決して名付けることのできないものが控えていて、それが私を「佐野之人」と名付けていることとなります。もちろん「名付けることができないうもの」というのも一つの名付けに他なりません。それは「名付けることができないうもの」とも呼べない、決して対象化できないものです。何故なら対象化しなければ名前は付けられませんから。

この対象化できない領域に私を私と名付けている者がいる、ということになりそうです。仮にこれを「本当の自分」と呼ぶことにします。この領域は対象化できませんから、本来考えることもできません。しかしこうであるはずだ、といった推測ならできるかもしれませぬ。

私たちはつねに、そうしてすでに全体のうちで生きています。私たちは全体の一要素として生きていると考えられます。この「全体」というのも少し厄介です。「全体」という言葉聞いて理解できない人はいないと思いますが、しかし全体を「理解する」と言うと、まず全体が意味を持ったものとして理解されます。意味を持つとはそこに意味の限定が起こっているということです。例えば全体は部分ではない、というような仕方です。意味が限定されてしまっています。しかし限定されたものはずで真の「全体」ではない、ということも我々は理解できます。また「全体を」理解する、と言うと、すでに「全体」が対象化されてしまっていて、自分と全体が区別されてしまっています。こうなると全体は

自分を含んでいませんから、もう「全体」ではありません。つまり全体も対象化できない領域にあることになります。

「本当の自分」と「全体」は対象化できない領域に何らかの仕方の一つになっていると考えられます。これはどのように考えたらよいでしょうか。まず考えられるのは私たちが胎児であったころの状態です。このころはおそらく（としか言いようがありませんが）、自分という意識もなく、自分は完全に全体の中に埋没していたと考えられます。それはちょうど生き物が自然に埋没して、自分という意識を持っていないのと同様です。あるいは深い眠りに入っている状態もそうかもしれません。これらについて私たちは全く思い出すこともできませんが、こうした状態に、はつきりとした意識、それも日常的な意識とは明確に質的に異なる明晰な意識を持つて入っていくのがいわゆる「無心」とか「無我」の心境だと考えられます。こうした境地に至るのは生まれつきの天才か、厳しい修業を積んだごく限られた人間ということになりそうです。私を含めたごくごく通常の凡人には望むべくもない境地のように思われます。

しかし奇妙なことに私を「私」と名付けている者を私は間違いない、それこそが本当の自分であると確信しています。ただそれを対象化する仕方为名付けることができないだけです。どうしてそんなことができるのでしょうか。どこかで私たちは本当の自分にはつきりと出会っていたのでなければなりません。しかも私たちは、つねに私を「私」と名付けることができずから、決して忘れることができないほどはつきりと出会っているのではないのでしょうか。一体どこででしょうか？本当に分からなくなりました。

もうひとつ分らないことがあります。私というのはそれだけでは決して成り立ちません。他者によって呼ばれることなしに私は呼び起こされることはないからです。誰が呼んでいるのでしょうか。Aさんでしょうか。それともBさんでしょうか。ですがAさんもBさんもつねには呼んでくれません。それにもかかわらず私は自分のことをつねに私と呼んでいます。また私はつねに自分として目覚めています。そうなるにつねに私を呼ぶ者がいなければならぬこととなります。

私は次のように哲学してみました。対象化できない領域、これが「いのち」です。それは本当の自分にして真の全体です。その全体が、絶対的な他者となって立ち現われ、それが「汝」と呼ぶのです。それと同時に対象化されない領域から、「私」が呼び掛けに応答する者として呼び起こされ、「それは私だ」と名付けられます。「呼びかけ」と「応答」と「名付け」は同時です。したがって絶対的な他者と「私」の成立も同時です。

自らの無知と誤解を恐れずに申しますならば、この絶対的な他者は宗教的には神や仏として出会われると思います。具体的には世界（状況）や世界の中の他者が不意に立ち現われ、呼びかけることによって、咄嗟にそれに応答するような状況です。その時に私は通常具体的な状況に応じて或る時は教師として、或る時は父として、或る時は死に行くものとして応答しようとしています。

「いのち」はつねに、対象化できない領域から「気づこう」と呼びかけています。「いのち」の働きよって、おまえはすでにかけがいのない存在であり、「いのち」に繋がっており、

他人にまねのできない仕方でのおまへの生き方がそこにあることに気づかせようとしています。それが「いのち」のニーズです。そうして「いのち」はおまへのように生きるのか、と問い続けているのです。しかし私たちはさしあたり大抵、出来合いの「自分」像や「教師」像で応えて、それで応えたつもりになってしまします。こうした応答は無意識に行われるため、私たちは「いのち」の呼びかけ自体に気づくことはありません。どうしてこんなことになるのでしょうか。

「いのち」の呼びかけに応答する者として名付けられた「私」が成立すると、それ自体が「私」、主体となってそちらの方から「本当の自分」を私だと反省的に自覚します。こうして「私」は絶対的な主体を取り込んで、自らがそうした絶対的な主体となつて、絶対的な他者に絶対的に対立するのみならず、こうした絶対的な他者をも自己のうちに取り込んで、絶対的な主体になろうとします。エゴイズムや我執、私心の成立です。こうなるもはや「いのち」の呼びかけに気づくことはできません。自分の中にある既知の、自分勝手な思い込みに過ぎない「自分」像や「教師」像でその場に臨む以外にありません。

### 三．人間とは何か

#### 人間―底抜けに分からない、深いもの

それにしても人間とはどのような存在なのでしょう。それをここで少し整理しながら考えてみたいと思います。人間は意識的分別的存在である以前にすでに事実としてすでに生き、存在している、と考えられます。どれほど意識し、迷おうともそれを含めて我々は事実として生き、存在しています。しかしそのこと自体を対象化して知ることはできません。こうして人間は一方において対象化できない領域において事実として生き、存在していることになりました。人間はこの領域を一步も出ることにはできません。原理的にできません。この「対象化できない領域」が「いのち」の領域です。人間はこうした領域を対象化して知ることができませんが、その中で生き、存在するためには、何らかの身体的な知を具えていると考えなければなりません。

しかしながら他方において人間は同時にあらゆるものを対象化し、意識する意識的分別的存在でもあります。しかも人間はこうした領域をも一步も出ることにはできません。これも原理的に出ることにはできません。先ほど「対象化できない領域」と申しましたが、これもすでに対象化されてしまっています。人間は「対象化できない領域」も対象化することを通じてしか言い表すことができません。しかし同時に「対象化できない領域」はそうした対象化をも拒否しているということも忘れてはなりません。しかもそのことが分かるということは、取りも直さず人間がそうした領域を何らかの仕方知っている、ということの意味しているのではありません。

こうして「いのち」の領域は「意識」の領域をも含んで全体であると同時に、「意識」の領域も「いのち」の領域を含んで全体となっています。人間はこの二つの領域を一即二、二即一という、絶対的に矛盾した仕方です。これを仮に弁証法的思弁的にある

いは絶対矛盾的自己同一というような仕方でも（これは決してたとえばヘーゲルがそうだとか、西田幾多郎がそうだと言っているわけではありませんが）、それは「意識」の領域の出来事にすぎません。「解決した」という意識がすでに分別だからです。

したがってこの矛盾は決して解けない。決して解けない、とは人間が分からない、ということですが。それも「解けない」という仕方では解決することや、「分からない」という仕方では分かってしまうことを突破する、底抜けの「分からなさ」です。人間とは底抜けに（無底的に）分からない、深いものと言えるでしょう。それと同時に人間は対象化できないものを対象化する、言い換えれば形なきものを形にするという矛盾した営みを不断に抱え込んだ存在だということにもなるでしょう。

### 学ぶ身が定まる

人間が「いのち」の領域に開かれながら「意識」の領域の中に閉じていることによって、「意識」が破れるということが起こりうるようになります。そこに「気づき」が成立します。とはいえそうした「意識」の破れを「気づき」として捉えるためには、「意識」の領域が「いのち」の領域をカバーし、これに例えば「気づき」という言葉を与えうるのではありません。そうでなければそうした破れは「気づき」としてさえ気づかれることはないでしょう。しかし「気づき」という名が与えられると同時に、「いのち」の領域への開きは「意識」の領域へと閉じられることとなります。そうしてそれがまた破れる。

こうした終わることのないプロセスにおいて、「分かった気にならないこと」と、徹底的にかつ深く「分かる」とすることという矛盾した態度が我々に要求されます。「深く分かる」とは、単なる辻褄合わせではありません。腑に落ちるまで考える、ピッタリした言葉を与えることができるまで考える、畢竟「領く」まで考え抜くということです。「分かった気にならない」という態度は、徹底的に「分からない」ということをどこまでも保持することですが、徹底的に「分からない」のは腑に落ちるまで考え抜く、すなわち徹底的に「分かる」ためであり、徹底的に「分かる」のは徹底的に「分からなくなる」ためです。「分かる」、「分からない」のどちらかに落ちて解決してしまう、ということはないのです。本当によく分からなければならぬのは、そうした理解が間に合わないような深いものに出会うためであり、そうした深いものに出会うのは、それを本当に理解するためです。こうして人間は学べば学ぶほど学ぶ身に帰っていく。学ぶ身が定まるとはそういうことだと思います。

### 「いのち」の領域

人間はつねに「意識」以前にすでに「いのち」として生きています。それではこの「いのち」の領域はどのようなものなのでしょうか。この領域は対象化できませんから、こうであるはずだ、というような推測しかできません。対象化できないのであれば、形と

いうものを持ちようがありません。したがって「意識」の領域が「有」、「多」、「差別」の

領域であるのに対し、対象化できない領域は「無」、「一」、「平等」の領域であると一応は申せましょう。しかしこうした表現が全て「意識」の領域でなされていることを忘れてはなりません。事実こうした表現では、「無」も「有」も「有」に対立するものとして、それ自身一つの「有」になってしまっていますし、「一」も「多」と対立するものとしてそれ自身「多(二)」のうちの一項に、同様に「平等」も「差別」と対立することで「差別」の一項になってしまっています。我々の「意識」はこうした分別的な有り方を決してやめることはできません。直観や思弁などによってこうした分別を超える、としたところで、「分別を超える」という表現自体がすでに分別的ですし、超えたにしてもそのこと自体は分別によらなければ言い表すことも理解することもできません。

対象化できない「いのち」の領域において「本当の自分」と「全体」は一つになっていると考えられます。その仕方はあらゆる生けるものがそうであるように、One for all, all for one であると考えられます。その際 one が本当の私で、all が全体です。そうして one と all が One for all, all for one という関係にあることによって、私は全体から完全に規定されながら、同時に完全に自由であるという有り方、すなわち絶対的主体性を獲得しています。

All を one が支える、その働きが one という特異な一点に集中します。それによってこの特異な一点においてしか起こりえない働きがただ一度という仕方で他の全てに対して創出されることとなります。そうしてこの働きが他の全てを支えていく。ここにおいて one は他の全てによって完全に規定されながら、あるいはむしろ完全に規定されているからこそ特定の何かによって規定されたのではない、独自の働きを創出することができます。しかもこの働きは何によっても囚われない「自(おの)づから然り」といった働きとなります。こうした意味でこの one の働きは全体から完全に規定されながら、完全に自由であると言えます。

こうして人間は「いのち」の領域において「本当の自分」と「真の全体」に出会っており、それとともに自分が他に替えることのできない存在であることを自他ともに認められ(Uniqueness)、全体と通じ(Union)、独自の仕方で全体の役に立っているという感覚(Usefulness)、さらには全体から完全に規定されながら、完全に自由であるという絶対的な主体性としての自由を身体的に知っているということになります。我々が One for all, all for one を人間のチームワークの理想として直観的に知っているのはこうした身体知によっていると考えられます。

こうした「いのち」の領域に生物、無生物を含めた万有が存在し、活動していると考えられます。そうして我々もかつて胎児や赤子の時は同じような有り方をしていたはずですし、現在でも熟睡の時などはこうしたあり方をしていないはずで、また意識的存在となつて目覚めている状態であっても、対象化できないので決して意識はされませんが、そうした意識以前のところすでに「いのち」の領域を生きているはずで、その領域は言語的、文化的、歴史的な世界であるはずで、One for all, all for one などというところ、なんやらパラダイスカ浄土のようですが、たとえそうであるにせよ、そこは戦争も惨事も災害も

ある世界です。それは人間の行為も、意識しているということそのものも含めあらゆる出来事が織りなす歴史的な世界であると考えられます。

### 「意識」の領域

次に「意識」の領域について考察しましょう。意識の領域は分別の世界です。我々人間は気づいたときはすでにこの世界の住人です。その世界のなかで我々はさしあたり大抵、自分が確かに有り、また確かに自分は自分である、と思っっています。それは自分が他に替えることのできない存在であり (Uniqueness)、自分より大きい何かと繋がっており (Union)、自分が役に立っている (Usefulness) という感覚を持っているということです。しかしそれは関係や役割の中でそのように思えるような扱いを受けてきた結果にすぎません。そのような扱いを受けて来ない場合に自分が有る、自分が自分であるという感覚が持てないであろうことは容易に想像がきます。また人間はこうした感覚を他人との比較の中で得ようとし、他人との比較には非常に敏感です。諂いや蔑み、嫉妬などはこうした比較に由来するもので、人間はこうした感情から自由ではありません。人間は関係や役割の中で、あるいは比較の中で自分の存在を確認して来れたからこそ、自分が有る、自分が自分であるという確信が持てるのです。

自分が有る、自分が自分である、と思っっている限り、自分自身が問題になることはありません。さしあたり大抵我々は、表立って口に出しては言いませんが、内心自分のことをいい人間だ、まともだ (普通だ)、正しい、何か取り柄がある、場合によっては凄いヤツだと思っっています。そうではありませんか。それはその方が生きやすいからです。何か至らぬこと、欠点があっても努力によってそのうち改めていくことができる、と信じて疑いません。根本的には自分に何の問題もありません。

しかし自分が有る、自分が自分である、という確信を人間は関係や比較の中で築いてきたとするならば、それが崩れるということも当然起こりうることです。親だということ自分の存在を支えてきた人は、子を失うことによって自分が存在する根拠を失うわけです。あるいはこうした特別な経験がなくとも、人間は結局死によって自分の存在を確認するすべを失うこととなります。死してもなお朽ちない、とも考えられますが、時間の問題でしょう。そのうちに忘れ去られ、存在したのかどうか問題にならなくなることは間違いないことでしょう。人間はこうした事実からさしあたり大抵目を背けていますが、目を背けているのは直視できないからです。しかしこうした事実を直視することによって始めて、自分自身が問いになります。自分は確かに有るといえるのだろうか、自分は自分であるのだろうか、自分は一体何者なのだろうか、何故存在しているのだろうか、こうした問いが真剣な問いとして迫ってくるようになります。こうして始めて人間は自分自身に向き合うこととなります。己事究明とはこうしたことを言うのだと思えます。宗教においても哲学においてもそうですが、自分自身をかつこに入れたまま、○○とは何かと問うているうちは、それは学問研究の問いであっても、宗教の問いでも哲学の問いでもありません。ところでこのような己事究明にあっても、人間はどうしても自らの存在に意味を持たせようと

しますから、言い換えれば自分が確かに存在するということを分かってしましますから、自分自身に向き合うということは、自力ではとてもできないことだということも銘記すべきでしょう。

人間は必ず死にますが、それが何時であるかはわかりません。その意味で人間は絶えず死に直面しているのですが、そのことに領けません。死の先には虚無があります。肉体的な死の先にある虚無こそが人間にとって問題となる死です。人間は常にこうした虚無に直面しているのですが、そのことにも領けません。今までたしかに生きてきたのだからそんな簡単に死ぬはずはない、と思っっています。こんなに確かに存在しているのに、それがあってもなくても同じだ、まったくの無意味だ、ということになるはずがない、と思っっています。意識は対象化し、対象化されたものを「有る」というように理解しますから、本質的に対象化できない「自分自身」や自分の死、虚無といったものに向き合うことはできません。しかし対象化しない仕方なら可能です。それが気分です。さらに人間はこうした気分を想像力によって現前させることもできます。もっともこのように現前した気分さえそれが気分として顕わになるためには、我々はそれを意識化し、対象化し、言葉にしなければなりません。ここに自分自身と向き合うことの本質的な困難が有ります。

### 「いのち」の三重の呼び覚まし

ところで我々は挨拶が返ってこなかった場合を想像して、人間が本質的に不安や孤独、無意味を抱えていることを明らかにしましたが、それは以上のような手法によっているのです。それにしても何故人間だけが、「いのち」の領域を出てこのようなものを抱えなければならぬのでしょうか。不条理と言えば不条理です。しかし我々はそれを「いのち」の中ですでに成就している、Uniqueness, Union, Usefulness に「気づく」ためではないかと考えました。少なくとも「いのち」の領域に埋もれたままではこれらに気づくことはできません。そこで「いのち」は、まず「いのち」の領域から我々を「意識」の領域へと呼び覚まします(第一の呼び覚まし)。その結果我々は不安、孤独、無意味を抱えることになります。こうして我々は無意識的に関係や役割の中で、安心、繋がり、意味を築いていくとします。しかし「いのち」は、そのようなものの中に真実はない、すべて崩れゆくものであることに我々を自覚的に目覚ましめることによって、我々が不安、孤独、無意味を抱える存在であることへと我々を呼び返します(第二の呼び覚まし)。そのことを通じて「いのち」は、もともと我々が他の方と同様、「いのち」によってどこまでも受け止められており、すでにUniqueness, Union, Usefulness が成就していることへと気づかしめる(第三の呼び覚まし)。こうした三重の呼び覚ましという仕方では、「いのち」は絶えず我々が気づこうと気づくまいと、「気づこう」と呼びかけていると考えられます。

浄土真宗ではその呼び声は「迷いの衆生よ。念仏を申してくれ」となるでしょう。苦しみや悲しみ、絶望の内にある人間(衆生)を見いだし、阿弥陀如来(法蔵菩薩)が本願を立てた、その本願が形になったものが「南無阿弥陀仏」です。「南無阿弥陀仏」すなわち「名号」は、我々が気づこうと気づくまいが阿弥陀如来が自ら名告り出ている、その声です。

我々は「迷いの衆生よ」と呼びかけるその声を「聞」き、その通りだと領ぎ、念仏を称える。こうして迷いの身に帰ることを通じて救い摂られていく、そういうことだと思えます。

### 自我の目覚め―第一の目覚め

上では我々が意識の領域へと目覚めさせられ、迷いの身となり、そのことに自覚せしめられることによって、もともと「いのち」の領域において生かされていることに目覚める、ということ。「いのち」の側から推測という形で考察しました。ここでは同じことを「意識」の領域にすでに立っている我々の側から考察してみましよう。

我々は気がついたときにはすでに意識の領域を一步も出られなくなっています。ここでも何が起っているのでしょうか。「自我が目覚める」ということが起っていると考えられますが、しかし自我は自分の意志で目覚めることはできません。必ず他者によって呼び覚まされることを通じて目覚めます。その他者は具体的な他者ではありません。具体的な他者は分別によって成立しますが、自我の目覚めは分別に先立っている、あるいは自他の分別は最初の分別だからです。ですから自我を目覚めさせる「他者」は唯一の「絶対的な他者」でなければなりません。この「絶対的な他者」は我々が意識的存在である以前に常に、そうしてすでにそこにおいて生きているところの「いのち」の領域そのものが我々に呼び掛けることによって、「絶対的な他者」という姿をとっていると推測されます。「絶対的な他者」による目覚めは具体的には世界とか現実によって不意に「汝」と呼びかけられる、という形をとるでしょう。この応答も自分の意志でなしたものではありません。気がついたら応答しているのです。しかしそれと同時に「いのち」の領域における「本当の私」の身体知は、絶対的な他者に対する意識的分別的な「この私」の自覚になっています。こうして我々は自我の目覚めとともに「本当の私」についての身体知を失っていると考えられます。

「この私」はただ呼び覚まされます。どうして呼び覚まされるのか。あるいはどうして対象化されない「いのち」の領域が絶対的な他者と「この私」の応答関係となるのか、それは分かりません。もちろん認識のレベルでは、「対象化できない領域」とはすでに対象化されていますから、「対象化できない領域」と言った時点ですでに「絶対的な他者」とそれを対象とする自我との関係が成立している、と言えるでしょう。しかしこうした議論はすでに分別的意識的な領域でなされていますから、ではそうした領域はどのようにして生じたのか、という問いに晒されることとなります。この問いに対して認識以前の存在のレベルにおいて「いのち」の領域が「絶対的な他者」となることを自ら意志したのである、というような説明を与えたとしても、これもやはり分別的意識的な領域での説明であることに変わりはありません。絶対的な無差別からどうして差別が生じたのか、あるいは認識がどのように生じたかを問うこと自体が、すでに認識のレベルに立っています。そうして認識のレベルでの答えを要求しています。ですから差別や認識の根柢を問い、それに応えようとする営み自体が大きな不合理を抱えていると言わざるを得ません。どうも我々は「ただ呼び覚まされている」という事実から出発して考えるよりほかになさそうです。

「この私」はただ呼び覚まされます。それと同時に我々は身体的な知を喪失し、分別的

意識的な存在として生まれ変わります。分別的意識にとつては、自らに呼び掛けた「絶対的他者」も、そうした呼び掛けによって目覚めた「この私」も、元来対象化できないものから立ち現れたものですから、有るとも無いとも言えません。そこには身体的な知の喪失が現前しているばかりでしょう。それは取りも直さず独自性 (Uniqueness)、連帯 (Union)、有用性 (Usefulness) についての身体的な感覚を失い、完全に規定されながら完全に自由という絶対的主体性の感覚を失うことです。独自性、すなわち他と替えることのできないユニークな存在として他からも認められ、自分自身も認めることができるという感覚の喪失感、自分はいてもいなくてもいい存在だという扱いを受けているように感じ、自分自身をもそのようなものと感じる「不安」となります。自分より大きいものとの「連帯」の喪失感「孤独」です。また自分がそうした自分より大きなものの中で役に立っているという「有用性」の喪失感「無意味」、すなわち自分が存在していることに何の意味もない、という感覚です。「完全に規定されながら、完全に自由である」という絶対的主体性の喪失感、抱え切れないものを抱えながら生まれてきた、あるいは生きているという「負い目」と、それにもかかわらずそれを自分で何とかしなければならぬ、自分の有り方を自分で決めなければならないという「自由」です。ここでは「完全に規定され」ていることが全体によって支えられているとは感じられず、抱えきれぬ「負い目」として感じられており、自然でありながら絶対的な主体であるといった自由は、あらゆることを自分で決めなければならず、その結果も自らが引き受けなければならぬという重荷として感じられています。こうして人間は自我が目覚めるとともに、不安、孤独、無意味、負い目、自由を抱えることとなります。

重要なことは自我の目覚めが過去において一度起こったということではなく、人間が自分を意識している以上、ということは熟睡しているのでも気を失っているのでもない限り、つねに自我の目覚めと身体知の喪失が起こっている、ということ。人間はつねに、そうしてすでに「いのち」の領域において生きながら、その都度自我が目覚め、それによって身体的な知を失い、不安、孤独、無意味、負い目、自由を抱える存在であらざるを得ないので。すなわち人間はつねに「いのち」の領域における身体的な知でありながら、それと同時にその喪失でもあることとなります。この矛盾は人間が「いのち」の領域と「分別的意識」の領域という二つの領域を矛盾的に生きることと別のことではありません。この矛盾を解くことはできません。

### 自己存在の確認―人間の日常的な有り方

このような不安定な有り方の中で、人間は必然的に、そうして無意識的に何かで自分の存在を支えよう、確認しようとするはず。手っ取り早く自分が独自であり、他と繋がっており、役立っていると思いたいのです。こうして人間は都合の良い世界、住みやすい世界観、人生観をその都度構成し、そこに住みつこうとします。こうして人間は「いのち」のニーズを仮初の仕方です。これは真実の自己に向き合おうとしない有り方ですから、逃避に違いないのですが、人間はこうした動向からも自由ではありません。

人間はつねに自我に目覚めつつ、その都度必然的かつ無意識的に自分の都合の良い世界の中に逃避しつつ没入しているのです。そうしてこれが人間の日常的な有り方なのです。

少し例を挙げて考えてみましょう。とても卑近な例ですが、まずは目覚めたときの不安について。私は電車で大学まで通勤していますが、時々寝入ってしまいます。ふと目が覚めます。周りの情景が目に入ってきましたが、これが行きの電車か帰りの電車かが分からない。つまり目の前の世界が分からないということです。それは同時に自分が何者であるか分からないということでもあります。行きの電車に乗っている自分と帰りのそれとは大違いです。大きな不安に駆られ必死になって世界を自分の関心(行きの電車であるか、帰りの電車であるか)にしたがって構成しようとしています。それは同時に自分が何者であるかを確認しようとする試みでもあります。つまりこの時点では与えられた世界、現実が何であるのか、自分が何者であるのかが分からないのです。同時に目の前の世界が確かに存在している、自分が確かに存在しているという実感も持てないのです。必死になって手がかりを探すことで、世界の構成に成功すると「よかった。帰りの電車だ」となります。こうして私は安心してふるまうことができます。自分が何者であるかが分かることで何をすべきかが分かるからです。私は講義の準備ではなく、自分の好きな本を読むことにします。

世界を理解することはつねに自分を理解することです。具体的には人間は自分をその都度の世界のなかで一定の役割を持ったものとして理解しようとしています。そうしてその役割を自分である、としてそこにアイデンティティを認め、その役割を自分として生きようとしています。それはその役割において自分の存在を確認したいからです。そのことは取りも直さず、人間がその存在において自分が何者か分からないといった不安を抱えていることを意味しています。

人間は一面においてこの自己存在の確認から自由ではありません。それはある意味において自分のためであるといえます。親の子に対する愛情、教師の生徒に対する愛情も、それが生身の人間の愛情である以上、自己存在の確認を必ず求めています。その意味でそれは決して無償の愛ではありません。自己存在の確認は、それが相手であれ、良心であれ、神であれ何らかの他者によって認められることを通じて得られるものですから、例えば母親は「おかあさん」と呼んでもらえないことに平気ではられません。呼んでもらえないということが分かっている場合でも、神や自分の内の道義的な他者である良心によって認めもらう必要があります。

もちろん母親としての自己存在の確認は何らの具体的な見返りを求めない時に得られるものです。教師もただただその生徒をほっておけないという気持ちから行動を起こしたときのみ、教師としての自己存在の確認が得られます。その意味でその愛は無償の愛とも言えますが、その場合ですら人間は自己存在の確認から自由ではありません。人間は自分の価値観に基づいた行動をすること、言い換えれば「達成すること」、「思いを遂げること」で自己存在の確認の満足や喜びを得ようとしています。こうしたあり方から人間が自由であるとは言えません。咄嗟の場合でも、人間は瞬時に状況を認識し、価値判断に基づいて行為しています。

しかし母親とか教師といった役割は人間が自己存在の確認のために勝手に作り出したもの、というわけではありません。「水」という言葉を始めて習得するケースを考えて見ましょう。「水」という言葉の音（ミズ）はすでに聞いたことがあり、それと「水」の身体知、というより身体知はその時には失われていますから厳密には「身体知の想起」が合致して、「ああ、これが水なんだ」と発見し、領く時の実感があると思います。これが「水」という言葉を習得した時であると考えられます。しかしそれと同時に「水」の身体知は意識的分別的理解になっていきます。こうして我々は意識の目覚めとともに身体知を失うことになります。それと同様に母親、教師という言葉も、身体的知の想起とすでに存在している母親、教師という言葉との合致によって始めて習得され、それとともに「分かった気」になり、その身体知を失うことになります。

こうして人間は言葉にならない領域としての母親、教師、水と、思いなしとしてのそれらとの間に絶えず引き裂かれ、その矛盾を生きるようになります。しかしさしあたり大抵人間は自分に都合の良い、住みやすい思いなしの「物語り」の世界を「意識」の領域に形成し、そこに安住し、そうした矛盾から目を逸らそうとします。こうして人間は大抵分かった気になって、生きており、またそのようにしか生きることができません。

同じことは「有る(存在)」についても言えます。この概念は重要ですので確認しておきましょう。人間は世界における自分の役割を見出した時、世界を発見し、自分を発見します。その時初めて世界が世界「であり」、自分が自分「である」ことができます。そのことを通じて世界「があり」、自分「がある」ことを実感します。「である」と「がある」を含めた「有る」も身体的に領くことよって成立する知です。「有」の発見は不安を抱えた人間には大きな喜びとなります。しかしそれが同時に有についての身体知を喪失することの上になり立っていることも明らかです。こうして人間はその都度自我に目覚めるとともに身体知を失い、不安に陥りながら、何かで自分の存在を確認しては安心している、こうしたプロセスが気づかない仕方で行われていることとなります。日常生活の安心、すなわち世界や現実はたしかにこの通りにあり、自分も自分としてたしかに存在しているといった安心はこのようにして得られていると考えられます。

我々は絶えず「いのち」の領域を生きながら、同時に呼び覚まされることよって「分別的意識」の領域を生きていると考えられます。それはつねに身体知でありながら、同時にそれを失っている、ということです。この矛盾は解けません。この矛盾ゆえに人間はその存在からして不安や孤独を抱えると考えられます。不安も孤独も、得られていた安心や通じ合うことが失われることよってのみ成立するものだからです。こうして我々は絶対的他者よって不安や孤独を抱えた者として呼び覚まされていることとなります。この状態が不安定なため、我々は何かで自分の存在を確認しようとして無意識的、かつ必然的に自分の住みやすい世界を構成してそこに住みつこうとするのが日常的な我々の有り方です。この「何か」とはもともとは何らかの身体的な知の想起との合致を通して獲得されたものですが、獲得すると同時に身体的な知が失われて分別的になっていく知です。

## 人生観・世界観の崩壊―第二の目覚め

こうした都合の良い、住みやすい人生観、世界観は自分の存在確認のために手っ取り早く構成したものですから偽であり、早晚崩れるものとならざるを得ません。それは何か偉大なものとの出会い、驚きという形をとることもあるでしょうし、死や罪、絶望などといった悲しみや苦しみを伴うような経験である場合もあるでしょう。あるいはただ単純にこうした世界に住み続けることに倦怠を覚え、うんざりしてしまう、という場合もあるかもしれません。こうして人間は不安、孤独、無意味、負い目、自由を抱えた者としての自分へと呼び戻されることとなります。もともとそのようなものとして呼び覚まされていた自分に目覚めることとなります。

こうした状態が不安定であることに変わりはありません。何とか自分の存在を確認しようとしみます。住みやすい世界を構成しようとしみます。必ずそうします。どこまでもそうしようとしみます。分別的意識的存在である人間はそうするよりほかにありません。しかしどのように自分を説得しようとしても最後のところでは身が頷きません。根本的には不安に目覚めていますから。どのような理屈を並べようとも「うそつけ、そう思いたいだけだろう」という声が頭から離れないのです。こうして人間は深刻な矛盾の中にあることが明らかになってきます。こうなるともうどうにもなりません。自分でどうにかしなければならぬという自由を抱えた「この私」に絶望する他はありません。それは他に替えることのできない自分を他から認めてもらい、自分でも認めることができ、自分より大きな何かと繋がり、その中で役に立っていると願うことから生ずる不安、孤独、無意味、負い目を自分で何とかしようとする「この私」に死ぬことです。

### 浄土真宗と禅宗の例―第三の目覚め

浄土真宗では「この私に死ぬ」とは善人としての私、自力としての私に死に、迷いの身に帰る、如来ならぬ衆生、凡夫としての人間に帰ることです。それは絶対的他者としての阿弥陀如来の「迷える衆生よ」との呼び声を聞き、「迷える衆生とは私のことであつた」と頷くことを通じて臨終を待たずして往生が決定する（即得往生、平生業成）、ということになるでしょう。凡夫である人間の「悲」しみを如来の「大悲」が包み込む、という形をとります。

これに対し禅宗では「この私に死ぬ」とは「迷いの身」、「絶望せる私」にも死ぬこと、すなわち「大死」を意味するでしょう。禅宗では迷い、悲しみを抱えた心（人間）というものが有る、という見方をしません。不安を抱えている者に対しては「その心を持ってきたら不安を取り除いてやろう」という仕方、人間に本来不安などないということを悟らせようとしみます。こうして禅宗では「いのち」の領域で常に、そうして既に生き生きと働いている、対象化不可能な「本来の自己」に目覚めさせようとしみます。人間がどれほど迷おうとも本来の自己は決して迷うことなく、また何一つ欠けることなく、あたりまえ（平常）の道を何事もなく（無事）只管歩んでいること（平常無事、平常心是道）に目覚めようとします。もちろんこうした目覚め（覚）のためには、自分が迷いの身であることに自

覚的であることが不可欠です。覚（悟り）には迷いが不可欠だからです。迷いを通してしか悟りは意味を持たないからです。あるいは覚から一步も出ないならば覚ということも意味をなさないとはいってもいいかと思えます。しかし禅宗の場合はこうした迷いの身であることの自覚、絶望のさらに一步先へと進ませようとはします。絶望を通じて他者によって救い摂られていることに目覚めるのではなく、絶望せる自分にも死ぬことを通じて「本来の自己」に目覚めることを促します。とはいえこうした目覚めは狙ってできるといえるものではない、という意味で所謂「自力」ではありません。ただ禅宗では悟ることが不可能であるとされるような迷いを人間が本来抱えている、という見方はしないのです。人間がその存在からして不安、孤独、無意味を抱えているのか、それとも本来は抱えていないのか、これはとても難しい問題です。

### 人間とは何か

浄土真宗、禅宗の間には「人間とは何か」に関する根本的な見方の違いが有りそうです。浄土真宗では生身の人間を、その存在からして不安、孤独、無意味を抱えた者として見出し、対しているのに対し、禅宗では人間を「いのち」の領域にある「本来の自己」として見出しています。浄土真宗では人間の本質を「意識的分別的」領域の内に見出しているのに対して、禅宗では「いのち」の領域に見出しているとも言えるでしょう。しかし人間の本質とは、二つの領域のどちらにおいても、その外に一步も出ることのできない矛盾した存在と考えることもできるのではないか、二つの領域の「一即二、二即一」的な、決して解くことのできない矛盾の中にある、どこまでも分からない、深い存在と考えることもできるのではないか、そのようなことをここで申し上げたかったのです。

### おわりに

今申し上げたことは単なる哲学です。考えただけにすぎません。ただの観念論です。しかもそれは佐野という名の「私」の思い込みにしすぎません。おまえは実際にどう生きているのだ、と問われれば、お答えに困ってしまいます。そもそも私はこのようなことを考え、みなさんの前でお話することで何をしているのか、何をしたいのか、それすらも分かりません。しかしそれがどんな場であれ、生きている現場のいちいちに「いのち」は呼びかけているとは思いますが、そのように感じもします。また「お前の考えなど薄っぺらだ」という呼びかけも聞こえて来る気もします。この場で共に哲学していただいたことを御縁に、ぜひ皆さんのお考えや、ご質問ご叱正をお聞かせ下さり、それを大切な糧として、皆さんと共にこれからも問い続けていこうと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

本論考 『気づこう いのちの尊厳』とは「は、平成24年6月22日に開催された「第40回公益財団法人教誨師連盟主催 広島矯正管区教誨師研修会 山口大会 総合テーマ『気づこう いのちの尊厳』」での発表原稿に大幅に加筆したものである（とりわけ「三、人間と

は何か)。加筆に当たって佐野明弘述『迷いに帰る』（真宗大谷派大聖寺教区二〇〇七年度  
推進員養成講座講義録 真宗大谷派大聖寺教区教化委員会 門徒研修小委員会編集発行  
2010年5月1日）に大いに示唆を受けた。